

した。この刑事責任は追及されていらないよう
だ。

もっとも、柳井建設は四二年中に、土木作
業（道路・下水・宅造など）の請け負い専門
に日雇い労働者を集めて個人経営で運営した
にせよ、仕事はなくなりつつあると、
他の土木建設会社と随時契約を結び、作業員
を四、五人ずつのグループに分け、大阪府下
の工事現場に送り、せん料を受け取って、い
たことが発覚し、職業安定法（労働者供給事
業の禁止）違反法（中間搾取）違反で書類送
検された。という記事が確かあったはずなの
に今手元がない。それと一緒に刑事責任の追
及の記事もどこかにまぎれていいるのかも知れ
ない。

一方、今度の火事で難をまぬがれた作業員
のうち一名は、二四日夜から大阪市東淀川
区内の別の作業員宿舎に移っている。この別
の作業員宿舎というの、柳井建設とどうい
う関係にあるのかは明らかでない。そして、
幾らか見舞金が出たかどうか。

無縁仏が何故悪い

飯場火災、ドヤの火事、下請現場の労災事故などで多
勢の死者が出るたびに、身元不明だ、出稼ぎの悲哀だ、
無縁仏だと、新聞、テレビが騒ぎ立てる。

最近の大正区の柳井飯場の死者にはわずかに七〇〇万
円程の労災補償金が出るとか、無縁仏の分は宙に浮くと
か、金がほしさに家族が名乗りでるのを期待するような
新聞記事を見るたびに、新聞記者なんて野郎は、美談つ
くりのためにあんな記事を書きやがるのか、それとも身
元不明の出る本当の原因を知らないのか、まあ新聞屋の
やる事にとにかく言うことが目的ではないが、ああいう
記事が事件の本質から読者の目をそらしていることだけ
は事実だ。

昭和十七年、十六才のときの夏休みに家出して、二十
数日飯場生活をして警察に見つかり、ピントをくらった
とき以来、家出の連続で今も家出中のこの四十年程の体
験から、わがことと見聞のいろいろを通じて、身元調べ
を他人が深入りしてやるのが本当に「無縁仏」にとつ

死者に対する労災補償については、一二人
のうち身元不明と未請求の計二人を除く一〇
人の遺族に一律二百万円の特例支金のほか、
五人の遺族に対しては五百五十八万四千五百
十円の一時金がすでに支給済み。残り五人
の遺族には毎年百五十万一千八百二十万円の年金が
支給されることになっている。

事故直後には、大阪市から死亡者一人一万
円、負傷者五千円の見舞金か、柳井建設から
は遺族に対して二十万円の見舞金かそれとれ
手渡されている。

柳井建設と遺族会との補償交渉は未解決で、
一人当り六百万円から百万円の圏で交渉が続
けられている。

焼死に対して労災が適用されたのは、焼付
た宿舎が労働者の命令で定められた建設業付属宿
舎規定によって、柳井建設の事業に必要な
付属施設だったとみなされ、入居していた作
業員は睡眠中でも「仕事中心」。そして死亡の
原因が宿舎の安全施設の不備だったことから
「業務上災害」と認定されたため。今後、飯
場での飲み食いはずべてタダ？

沖野奈加志

て幸せなのか。探しあてられた家族にとって有難いこと
なのか、大いに疑問がある。

あるとき、本船で墜落事故で〇が死んだ。虫の息で「
クニには言うてくれるな」と言い残した。だが、おせつ
かいな役人と警察が知らせた。電話で死んだと聞いた妻
は、「そんな人離縁したので関係ありません」と言った。
それから数時間後にオジという人物が電話で事情を聞き、
やがて「関係ありません」といった。妻をつれてきた。
生前〇と親しかった友人たちの話によると、〇は山林
労働者だった。山では地主は絶大な権力をもって労働者
を支配している。

〇はそういう地主の何番目かの娘のところへ突然養子
に出された。

地主の方は、娘を嫁に出さず、養子をとることで勢力
（労働力）を確保するのだ。

戦時中は、〇も何とか辛抱した。戦争が終って民主主
義になってみると、タネ馬みたいな生活に嫌気がさした。

町まで運んだ材木の代金をもってギャンブルに行く。汚ないものにでもさわるみたいだ。タネだけ、それも女の側から求めたときだけ吸いとられる。それにくらべ、たとへ商売にいえ、男心をくすぐる女にのめり込んだとしても、集金の使い込みは、だけの責任ではない。

家出して名古屋、横浜、大阪と渡り人足として津を渡り歩いた。山林業をしていたので、陸の建設現場をきらったのだ。

Oにとって港は心の休まる場であつた。そして、女傭いになつていたが、妻がわりの若い男ができていた。

うはその若い男とギャンブルのためにオールナイトで金を稼いでいた。そしてオールナイトの夜中に墜落して死んだのだ。Oの死の床には若い男がしがみついて泣いていた。それと察した「妻」は、その場からクニへ引きかえした。

労災補償金の申請に当って、「若い男」には資格がない。また「オジ」と「妻」がやってきた。死の床に現われたときとはうって変つた態度である。

「オジ」は業者からの慰謝料が少ないと組合役員にくつてかかるのである。

「妻」は「あの人は働き者でよく稼いだのに、私ら親子は……」(ナミダが出ない)

内妻はどりなつたか。「客をとらされている」という噂があつたが、さだかではない。

以上二例、こんな話、好んで書くべきものではないが、労働災害の一番多い下請現場で働き、飯場やドヤの火事の死者が度々あるのは知つたうえで、つまり本人は納得のうえで、無縁仏になることを苦にしていないうちもいるのだから。

無縁仏になるのが嫌な人は、どこかに連絡先を言うときなさいよ、という指導なり呼びかけは大いにやってもよいことだが、

「死者に対する冒瀆だ」などと大げさな言い方も嫌いだが、死体から指紋までとって身元を探り出すことはどうかと思う。警察には、もっと別の狙いがあるのだろうが、焼けて当り前の飯場を放置していて、焼けると不法建築だ労基法違反だと責任を、責任のとれない飯場のオマジにすりかえるのだ。

生きてる間中、いついかな親に合うかとヒヤヒヤしている者にとっては、無縁仏になることが真の解放なのだ。労災補償の金、「オレ」の命の代金をニッコリと受取られるのかと思うとムジズが走る思いをする者もいるのだ。これまでに数限りなく身元探しにかかわつたことがあ

推測ではあるが、「オジ」と「妻」ではないそぶりがしばしば見られた。

「クニへは知らせてくれるな」のOの最後のことはすべての事情をOは知っていたのだろう。

Sが荷崩れの下敷で死んだときのことである。Sも西成で働くようになって十年近く、二人の子連れの女と同居していた。

Sが労災事故で死んだと知れたとき、同じアパートのヤイ公が「ゼニとつたるから」と、Sの内妻を仏ダンの前でおさえてしまったのだ。ヤイ公がゼニにしようと思ひやりすぎたため、相手もヤクザ企業のこと、話がこじれたので、監督署が親族さがしをやったところ、名古屋で弟が八十人はど人をつかう中小企業を営んでいることがわかつた。

そして労災補償はその弟に渡ることになつたのだが、弟はいらないという。「あんな兄貴でも一話になつてくれた女がいたのなら、その女にやってくれ、その金があつてどうなつてもかまいません」というのである。

しかし、おせっかいな役人や役員の「思いやり」で弟に金が渡ってしまったのである。

ゼニにならなかつたヤイ公は怒りくるつたという。

るが、その経験から見ると、すんなり身元が分つた場合は、かけつけた家族は本当の涙を流すのであるが、なかなか身元がわからず、骨箱を火葬場にあずけて探し回つてやつと家族に連絡がついた場合、まずそういう場合の家族のたずねることは、労災か交通事故か、つまり金になるのかならんのかをたずねるのである。

酔っぱらつて路上で凍死していた、などというときは、「顔見んことには息子かどうかわからん」と骨の引き取りもことわるのだ。

あるとき、身元探しをやっている係のボリ公が、「交通事故の場合なら、不思議と家族の名乗りがあるんですかねえ」と、ゼニにならん仏さんを前に言うのである。

ああ金の世や、金の世や

一も二も金、三も金

地獄沙汰も金次第

ああ金の世や、金の世や

トコトットト

(平民ラッベ節より)

新聞はなぜ「出稼ぎ」にこだわるのだ

柳井建設飯場の火事については、前の筆者が書いていることに同感だが、もう少し正面から新聞にヒトコト文句をつけたい。

ほんとうにそうだったか？

毎日新聞の六月二十五日朝刊は「焼死者の軌跡」という表を作って十一人の年令や出身地や家族とのつながり具合を見せていた。

それによると、新聞の調べで「毎月送金」していたのが確実な人は二人、その二人以外でクニへ帰るこちがあった人が三人となっている。しかし、うち一人は「五〇年八月一週間帰郷、また不明」という状態で、最初にクニを出たのが「三十一年ごろ」というから、いままで約二〇年のうち、一週間だけクニや家族とつながったただけだ。

送金もせず、クニへ全然帰らなかった人のうち二人についてはこう書いてある。

「若いころ大阪へ来たまま時々手紙を出す程度——46歳」
「若いころ家出したままほとんど音信不通——47歳」
これがどうして「出かせぎ」なのだ。

出かせぎというのは、クニと家族とのつながりを絶やさず、金を送ったり、みやげを抱えて帰ったりする人々のことだろう。それとも、新聞は「家出人」が大阪で「かせい」で生きていることを「出かせぎ」と呼ぶのか。モンドイはことばの使い方ではない。

前の筆者が身元探しについてフンガイしていたのと根は同じところで、なんでも「出かせぎ」にしてしまう新聞の手口に抗議したいのだ。

クニとの縁・家族との縁。

それはたしかに重い太いものだが、あえてそこから切れて生きようとして、現に生きてきたその人々は、世の中の良識にはそむいてたかも知れないが、自分のギリギリの生をすごしていた。時には、あるいはしょっちゅう

クニや家族を思い出しながらそこにはつながらうとはせず、一人のアンコとして。

不幸な事故で死んだとたんに、その人々を「出かせぎ」と呼ぶのは生前の気持をふみにじった死者へのポートクですらある。

人が、その一切を賭けて選んだ生き方を、実際とは別な、世の中の見方でキレイゴトふうにしてしまふ必要はどこにもない。

死んだ人々は、そして釜ヶ崎にいるものほとんどは、たとえ元出かせぎであっても、いまもなお「出かせぎ」といわれるものではない。

新聞は毎年、八月の盆になると書くではないか。釜ヶ崎を故郷と思う人々が帰ってきて街は人で一杯だ——と。釜ヶ崎に在るものほとんどは出かせぎではないといふのは、自分たちを卑しめてする表現ではない。自分の生き方を自分で選び、あらかたは自分の死に方も想像できているものの、一つの誇りとしてのいうのだ。

居直りとか、ヤセガマンとか、ヒネクレテイルとか、そんな非難は承知の上の、だからものすごくやりきれなくもあり、後悔が胸のなかで音をたてていたりする。しかし譲れない真実なのである。

山谷の雑誌「足場」の紹介

「私はこの雑誌におれ連下層社会に生きる仲間の、正しく人間であらんとする者の言葉の追求を期待する」(「創刊に当たって」より)というチョット難しい前おきのついた、ガリ刷り、二十四頁の雑誌。

これまでの雑誌が「マスコミに騒がれ、当初の志は消え失せてしまい、山谷のモノ書きとして浮き上がり、労働者からも浮き上がり、自己の役目が果たなくなり、ついには山谷から雑誌とともに姿を消すはめになっていきました」としてそうならないことを約束しています。

◎ 内 容 ◎ 創刊号 百円

底の方の詩……森ひろし

私と山谷……中村 実夷

「足場」俳壇……森ひろし

「足場」歌壇……坂井正幸

身障者と山谷労働者……丸岡忠三

純粹なる矛盾(4)……原田三好

連絡先——東京都荒川区荒川郵便局私書箱三四号

「足場」編集委員会